

新収蔵史料展

近世文書の諸相

— 寺社文書・武家文書・村方文書 —

平成25年12月17日(火)～平成26年1月19日(日)

金沢市立玉川図書館近世史料館

近世史料館では、毎年新たな史料の収集・整理・公開をしています。今回展示する史料は、最近整理され公開が可能になったものです。

近世の古文書には様々な種類のものがあります。二、三をあげれば、公家文書・寺社文書・武家文書等々です。それら様々な古文書の中から今回は寺社文書・武家文書・村方文書の一端を紹介します。

東本願寺再建年表（寛政度）

年 月 日	西 暦	事 項
天明 8 年 1 月 30 日	1788	天明の大火 御影堂・阿弥陀堂焼失
寛政元年 3 月 28 日	1789	御影堂新始
寛政 7 年 3 月 15 日	1795	御影堂立柱式
寛政 8 年 11 月 17 日	1796	阿弥陀堂新始
寛政 9 年 3 月 10 日	1797	御影堂上棟式
寛政 10 年 3 月 23 日	1798	阿弥陀堂上棟式
寛政 11 年 3 月 26 日	1799	御影堂門(大門)新始
享和元年 3 月 15 日	1801	大門建立供養

『真宗本廟（東本願寺）造営史』

【寺社文書】

寺社文書として東本願寺の文書を紹介します。

ここに展示している文書は、京都の東本願寺から金沢の瑞泉寺へ出されたものです。東本願寺は江戸時代、天明八年(1788)、文政六年(1823)、安政五年(1858)、元治元年(1864)と4回火災に遭

い、その都度全国の門信徒から送られてくる物資や懇

志で再建しています。そのため東本願寺は再建が進んでいくことを知らせる様々な文書を出しました。今回の展示は、天明八年の焼失から再建が成就していく過程で出されたものです。再建の決定を皮切りに順次再建が進んでいく様子がそれぞれの文書に書かれています。再建の様子を知らせることにより、門信徒のさらなる懇志を期待したのでしょうか。

ところで瑞泉寺は、加賀藩でどのような位置を占めていたのでしょうか。加賀藩では慶安元年(1648)に寺社奉行が置かれ、この時仏教各派及び地域毎に

触頭が決められました。慶安元年に東本願寺派の金沢・石川郡等 139 寺の触頭になったのは専光寺でしたが、享保十四年(1729)に瑞泉寺が加わり、天明五年(1785)には善福寺が加わり、三カ寺体制になりました。そして幕末までこの体制を維持していきます。

【武家文書】

武家文書として伊藤家文書と奥村橘次郎文書を紹介します。

伊藤家の由緒書では、伊藤家における本家初代外記重延は利常の代に召出され 1,200 石の知行を下されました。その分家の伊藤家は、六世の祖父伊藤帯刀の代に分家した次男筋にあたります。この時の知行高は 300 石でした。五世の祖父幸左衛門は 50 石加増され 350 石になりました。そして江戸時代最後の伊藤久米之助まで 350 石の知行高を維持しました。

この伊藤家には分家した六世の代から歴代の当主の知行宛行状が残されています。武家にとって知行宛行状は、自家の家格を証明する大切なものだから、歴代のものが大切に保管されてきました。

一方年貢の収納場所を示す所附は自家の収入を確定する大切なものですが、あまり残っていません。この伊藤家では仮所附が 1 点残されています。さらに同時期の収納帳もありますので、これらの史料から伊藤家の収入を下記に示します。表面的にはわかりにくい武家の経済面、特に実際の収入がよくわかります。ちなみに天保十五年(1844)の収入は米 127 石余と銀 192 匁 5 分でした。

天保 15 年分 収納高

単位：米は石 銀は匁

村名	草高	定納口米	借知	蔵敷引残高	春秋夫銀
石川郡安吉村	54.339	32.026		31.398	40.32
河北郡二日市村	23.606	16.013		15.7	20.16
砺波郡北野村	43.657	26.215	23.33	2.83	33
砺波郡道坪野村	18.992	13.094		12.837	16.49
射水郡穴場新村	124.078	52.431		51.403	66.01
鹿島郡中島村	20.701	13.122		12.865	16.52
合計	285.373	152.901		127.033	192.5

090-1310-26 より作成

次の文書の奥村橘次郎は奥村宗家第十代奥村尚寛です。ここで展示する文書は、奥村橘次郎の知行地から蔵入れされた米を現銀化するために出された文書群です。伊藤家文書からもわかるように、加賀藩士の年貢は加越能三カ国のそれぞれの村から納められます。各村々の年貢は蔵宿に収納され、武士はその年貢を売って諸費をまかさないです。米切手中の「石動米」「福光米」「宇

出津米」という表記は、米が収納された蔵宿の場所を示しています。

奥村宗家の知行は 17,000 石ですが、与力知が 1,500 石あります。残り 15,500 石の中から家来へ知行や扶持などを与えます。右の表は天保六年(1835)の「家来知行高等交名帳」より作成したものです。家来への知行を引いて、約 11,000 石が奥村家そのものの知行となります。その中から扶持以下を支給します。

家来知行高等

知行	4,430 石
扶持	559 人扶持
金	52 両
給米	504 俵
給銭	662 貫文

ところで明和六年(1769)奥村尚寛は病気のために 5,500 石減石されました。その結果、この年は例年の半分程の収入になりました。それが原因で借金したのでしょうか。もう一つは収納米の売払いのための切手です。この文書では、七月中に収納される今年度の米を当てにして銀子を得ています。いわゆる前借です。武家の台所事情の一端が垣間見えます。

なお尚寛には、袖裏雑記をはじめ多数の著書があります。

【村方文書】

江戸時代の村にとって一番大切な文書は村御印です。村御印とは、各村の草高・免(税率)及び小物成の種類を定め、藩侯の捺印を加えてその村に与えられたものです。加賀藩領の村々に最初に出された村御印は慶安三年(1650)のものですが、その後明暦二年(1656)、寛文十年(1670)に交付されました。ただし村御印はその都度交換されるので古い村御印は村に残りません。そのため寛文十年の村御印が、幕末まで村に大切に保管されてきました。

今回展示する板ヶ谷村(現金沢市)の村御印は、村御印としては少し他の村のものとは異なるところがあります。それはこの村が「遠山」で米作が不十分なために年貢の一部を「銀納」しているところです。

もう一つ村にとって大切な文書は年貢皆済状です。村は御蔵入地や給人知に分かれているため、御蔵入地は代官から、給人知は給人から皆済状を得、これをまとめて十村に提出します。

ここに紹介する明嶋村(現白山市)の草高は、寛文十年の村御印では 1,404 石です。安政二年の皆済状は 11 枚あり、合計の草高は 638 石 6 斗 5 升 1 合です。残っている皆済状は村高の 2 分の 1 弱のものですが、村に給人知・御蔵入知・与力知が含まれていることがわかります。

次に紹介するのは村井村(現白山市)の年貢皆済目録ですが、これは村が請取った皆済状をすべてつないで、十村が改作奉行に提出したものです。改作奉行の裏書を得てはじめて村としてこの年の年貢を皆済したということになります。なお藩政初期の皆済状は藩主から出されていますので、あわせて展示します。

【展示史料一覧】

標 題	番 号	年 月 日
御影堂新始の日被仰出に付書状	090-1318-1	11月28日(天明8年)
御影堂柱立日御規式治定に付書状	090-1318-5	9月5日(寛政6年)
御影堂遷座并清浄院法会日程に付書状	090-1318-7	3月21日(寛政9年)
大門御供養会治定に付書状	090-1318-14	正月(享和元年)
京都本願寺大門絵図	18.1-17-1	寛政12年
京都東本願寺大門之図	090-1081-14	年未詳
前田綱利(綱紀)知行宛行状	090-1310-1	延宝7年3月8日
前田重基(重教)知行宛行状	090-1310-11	宝暦6年7月13日
収納帳	090-1310-26	天保15年9月
知行仮所附覚	090-1310-27	甲辰(天保15年)9月
先祖由緒并一類附帳	090-1310-30	文久元年7月
奥村家譜	16.31-84	文政6年
加賀藩陪臣侍帳	090-193-1	昭和14年
奥村橋次郎銀子借用証文	090-1305-22	明和6年10月
奥村橋次郎収納米渡方依頼状	090-1305-23	明和7年7月
奥村橋次郎収納米渡方依頼状	090-1305-25	明和7年7月
奥村橋次郎収納米渡方依頼状	090-1305-27	明和7年7月
勝千代様御用絵図	16.16-39-3	(文化9年)
延宝年間金沢城下図	090-598	大正2年写
加州加賀郡板ヶ谷村御印	090-1313	寛文10年9月7日
寛文十二年能美郡文兵衛組年貢皆済状	090-1142-2	寛文13年8月8日
石川郡明嶋村年貢皆済状	090-1317-1	安政2年11月
石川郡明嶋村年貢皆済状	090-1317-4	安政2年12月
石川郡明嶋村与力明知年貢皆済状	090-1317-5	安政2年12月
石川郡村井村年貢皆済目録	090-1373	嘉永5年12月
石川郡組分絵図	13.0-110-10	安政4年
河北郡組分絵図	13.0-110.11	安政4年

* 掲載史料と展示史料が一致しないことがあります。